●〈症例〉

保存的に加療し得た魚骨による 胃穿孔の1例

神野 彰 李世容 大池 翼 尾形知英
菅野真理子 金野 朗 市川欧子 櫻井則男
山田 俊夫

東京臨海病院／消化器内科
〔Key Words〕 魚骨, 胃穿孔

はじめに

魚骨による胃穿孔・穿通は本邦で報告例が急増しているが、依然として稀な疾患である。報告例の多くで手術が施行されている。今回我々は保存的に加療し得た魚骨による胃穿孔の1例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者：42歳，女性。

主訴：心窩部痛，嘔気。

既往歴・家族歴：特記すべきことなし。

現病歴：前夜から心窩部痛と嘔気を自覚していた。次第に増悪して歩行時に痛みが響くようになったため、近医を受診したのち精査加療目的に当院を紹介受診した。

来院時現症：身長148cm，体重56kg，体温37.6℃，脈拍82/min，血圧115/82mmHg，腹部全体に右側優位に圧痛と反跳痛を認めた。腸蠕動音は正常に聴取された。

血液検査：左方移動を伴う白血球数の増多と軽微なCRPの上昇を認めた (Table 1)。

胸腹部単純X線検査：明らかな異常所見を認めなかった。

腹部CT：胃前庭部に浮腫状の壁肥厚を認め、その前壁を貫いて腹壁へと至る骨濃度の線状陰影を認めた (Fig. 1)。

上部消化管内視鏡検査：胃幽門前部大彎に魚骨と考えられる異物の一端が辛うじて露出していた (Color 1)。送気や蠕動の状態によっては異物のほぼ全体が胃壁内に埋没した。異物を把持鉗子で慎重に摘出した (Color 2)。摘出された異物は長さ2.7cmの弧状で魚骨と考えられた。摘出後心窩部痛と嘔気は速やかに改善した。

臨床経過：魚骨による胃穿孔の診断で入院となった。禁食，抗菌薬 (Cefmetazole 2 g/日) 投与，経鼻胃管に

Table 1 Laboratory data.

WBC	14700 / μ l	Alb	4.5 g/dl
Neut	89.9 %	T-Bil	0.9 mg/dl
Eos	0.3 %	AST	22 IU/l
Baso	0.2 %	ALT	8 IU/l
Mono	3.3 %	LDH	211 IU/l
Lymph	6.3 %	γ -GTP	20 IU/l
RBC	444×10^4 / μ l	CK	149 IU/l
Hb	13.8 g/dl	Amy	75 IU/l
Ht	41.1 %	BUN	12 mg/dl
MCV	92.6 fl	Cre	0.46 mg/dl
MCH	31.1 pg	Na	141 mEq/l
MCHC	33.6 %	K	3.7 mEq/l
Plt	20.7×10^4 / μ l	Cl	106 mEq/l
PT	102 %	CRP	0.52 mg/dl

Fig. 1 Abdominal CT scan showed a linear object with bone density (arrows). It penetrated the stomach.

Fig. 2 Clinical course.

による減圧で加療した。第2病日に解熱，第3病日に経鼻胃管抜去，第4病日に抗菌薬投与終了，第5病日に食事開始，第7病日に退院となった (Fig. 2)。

考 察

魚骨による胃穿孔・穿通は稀な疾患であり，過去の報告によれば魚骨による消化管穿孔・穿通に占める割合はわずか1.6%¹⁾～8.7%²⁾に過ぎない。しかし本邦では近年その報告例が急増しており，医学中央雑誌で検索し得た限り自験例を含めて57例 (会議録含む) あった。

Table 2 Reported cases of perforation or penetration of the stomach by a fish bone treated conservatively in Japan.

Reporter	Age	Sex	Symptoms	Length of a fish bone	Location of perforation or penetration	Complication
Tanaka	43	M	Abdominal pain, Fever	2.5cm	Prepyloric region, Lesser curvature	Peritonitis
Tanaka	56	M	Abdominal pain, Fever	3.7cm	Antrum, Anterior wall	None
Hosokawa	63	M	Abdominal pain	4cm	Antrum, Anterior wall	Peritonitis
Suzuki	58	F	Abdominal pain	2cm	Antrum, Anterior wall	Peritonitis
Ando	68	F	Abdominal pain	3cm	Prepyloric region, Anterior wall	Peritonitis
Ikeda	76	F	Abdominal pain	3.2cm	Antrum, Anterior wall	None
Muramatsu	63	F	Abdominal pain	2cm	Prepyloric region, Anterior wall	Peritonitis
Shiba	67	F	Abdominal pain, Back pain, Constipation	3cm	Antrum, Lesser curvature	Peritonitis
Matsukuma	47	M	Abdominal pain	4.2cm	Prepyloric region	None
Hirayama	63	M	Abdominal pain	3.2cm	Antrum, Lesser curvature	None
Our case	42	F	Abdominal pain, Nausea, Fever	2.7cm	Prepyloric region, Greater curvature	Peritonitis

そのうち保存的に加療し得た症例は自験例を含めて11例^{3,4)}あった(**Table 2**)。

年齢は24～89歳まで平均64.3歳であり(不詳1例)、保存的に加療し得た症例は42～76歳まで平均58.7歳であった。性別は男性が27例に対し女性が30例であり、保存的に加療し得た症例は男性が5例に対し女性が6例で性差は認めなかった。症状は腹痛を呈したものが47例、発熱を呈したものが22例、無症状のものが2例であった。保存的に加療し得た症例は全例腹痛を呈し、発熱を呈したものが3例であった。魚骨の長さは1.5～5.2cmまで平均3.22cmであり(不詳12例)、保存的に加療し得た症例は2～4.2cmまで平均3.05cmであった。魚骨の刺入部位は幽門前部と前庭部が合計30例、角部が7例、体部が3例であった。また小彎側が17例、前壁側が14例、後壁側が5例、大彎側が4例であった(不詳17例)。保存的に加療し得た症例は全例幽門前部または前庭部であった。そのうち前壁側が6例、小彎側が3例、大彎側が1例であった(不詳1例)。合併症は腹膜炎が27例、腹腔内膿瘍が19例、肝膿瘍が11例、胃癌が5例であり、保存的に加療し得た症例は腹膜炎が7例であった。

以上より、保存的に加療し得た症例は腹痛を呈し、しばしば腹膜炎を合併しており、結果として膿瘍等の合併がない発症早期に受診した可能性が高いと考えられた。また魚骨が幽門前部または前庭部の前壁側に刺入する症例は、肝実質や肝門部の脈管を損傷するリスクが低く、肝膿瘍も合併し難いと考えられ、結果として保存的に加療し得る可能性が高いと考えられた。

おわりに

保存的に加療し得た魚骨による胃穿孔の1例を経験したので報告した。

文 献

- 1) 松井昭彦, 岡島邦雄, 川西端哉, 他: 魚骨による消化管穿孔の2治験例—症例報告ならびに本邦報告121例の検討—. 日臨外医会誌, 47: 955—961, 1986.
- 2) 安東俊明, 恩田昌彦, 森山雄吉, 他: 誤嚥魚骨による消化管穿孔・穿通の3例. 日消外会誌, 23: 889—893, 1990.
- 3) 田中洋一, 宮崎修一, 福田 保, 他: 内視鏡下に摘出した魚骨胃壁穿通の1例. Gastroenterol Endosc, 41: 1474—1477, 1999.
- 4) 安藤公隆, 松橋延壽, 宮原利行, 他: 内視鏡下の異物摘出で治癒した魚骨による胃穿孔の1例. 日臨外会誌, 66: 2416—2421, 2005.

〈カラーは4頁に掲載〉

A case of penetration of the stomach by a fish bone treated conservatively

Akira Kanno Se-yong Lee
Tsubasa Oike Chie Ogata
Mariko Sugano Akira Konno
Hiroko Ichikawa Norio Sakurai
Toshio Yamada

A 42-year-old woman was admitted to our hospital for a complaint of epigastralgia with nausea. Abdominal CT scan showed a linear object with bone density. It penetrated the stomach. Esophagogastroduodenoscopy showed a fish bone stuck into the prepyloric region of the stomach. The fish bone was removed with a grasping forceps. Then she was treated conservatively with antibiotics. In a review of the literature, including our case, 57 cases of perforation or penetration of the stomach by a fish bone have been reported in Japan. Among them, only 11 cases were treated conservatively.

Department of Gastroenterology, Tokyo Rinkai Hospital.